

楠の木に寄せる

教育学部長 小笠原 道雄

平成七年度の移転完了時に、原田学長のご提案もあって「学部の木」、学部を象徴する木を選定し植樹することになった。若干、植物に関心の深い人とも相談し、教育学部は、楠の木を選定した。辞書によれば、楠の木は「常緑高木、わが国に産する樹木中最大のものの、全体に芳香がある樟腦の木」と記されている。

私は年を経た大樹を見るのが好きである。それは大きい、高い木というより、長い間風雪を凌いで生きて来た経験そのものを見るような気がするからである。太い幹に手をふれ



ると、固いその皮膚の下に、確かに人間と同じように経験を重ね、成長し続ける息吹が感じられる。

生長した楠の木は、毅然として、他の木々を圧倒する雰囲気と共に、樹形が丸く美しく、周囲の木々も受け入れる寛容さ、忍耐強さをも示し、その上、全体に佳香がある。

卒業生の諸君、どうか楠の木の成長に示されるその経験、特質を自己の社会人としての成長と重ね合わせて示していただきたい。そして十年後、あるいは二十年後、芳香漂う大樹のもとで共に教育を語り合いものだ。諸君の健闘を祈る。

懐かしいイギリス留学の思い出

教育学部 岩本 自由子



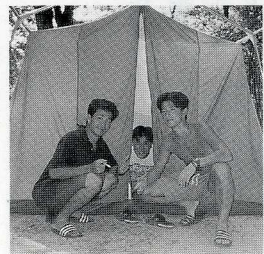
イギリスのワインも旨い! (本人右から3人目)

この四年間の大学生活において一番大切になったものといえば、それは友人である。友人といっても、表面的な付き合いのものから深い場合とさまざまだが、私がこの大学生活を無事に楽しく過ごすことができたのは、一生付き合っているような、そんなかけがえない友人との出会いがあったからである。さぞと思える。

特に、半年のイギリス留学に出会えた人たちは特別だった。片言の英語でも、互いの思いがあればどの国の人たちとも気持ちは通い合うんだと実感できたことで、それまで表面的なことばかりに

自分探しの一年

教育学専攻科 常井 慎太郎



キャンプで友人と(本人中央)

とられていた自分に気がつくことができた。近頃、一人暮らしを始めたばかりの頃の自分が懐かしい。あれからもう四年もたつのかと考えるとすごく早い気がするが、今の私の友人である人たちはまだ出会ってなかったことを思うと、時の重みを感じる。これからもずっと大切にしていきたい。

私の大学生活

教育学専攻科 好永 昌代

今しかできないことをしようと思いつきながら、大学生活を過ごしてきた。いろんなバイトをした。市民球場でジュースを売ったり、ラーメン屋で威勢よく「へい、いらっしやい」と叫んだりした。ラーメン屋では、洗面器くらい大きな天津飯をペロリと平らげるトラックの運転手さんにア然とし、眼鏡屋では、「他の買い物ついでに立ち寄っただけなの。ホットホッホ」と言いつつ、十二万円もする宝石入りの眼鏡をサラッと買ってしまっただけで間に会った。

真理を見失わず ゆたかな心を

学校教育学部長 間田 泰弘

卒業、修了おめでとう。多くの人の支えを得て今日が迎えられたことを共に感謝したい。

君たちの多くは小さな頃から受験社会に生き、競争して大学生になったと思う。その過程で得られたことも多いであろうが、逆に他者を思いやる心など多くの大切なことに心がもたれにくく、実行し難い時もあったと思われ。しかし入学後、君たちはさまざまな指導を受け、自ら学び、友との交流や社会勉強をとおして、学問の面だけでなく豊かな心も一層成長してきた。その一例として、災害が発生するとボランティア活動に多くの広大生が参加している。話題にならない身近なところで小さな親切を続けている者も多い。

利益にならなくても、むしろ犠牲が生じて、善いと思つたことは直ちに実行する、という豊かな心をもつ彼らをすばらしいと思う。と同時に、そのような資質をいつの頃からか育てられたご両親や周囲の人を心から称えたい。

今、また競争社会へ船出だ。国際化、合理化が進んでいる現在、競争に負けない努力が必要である。しかし、どんな利害をとるもなうときでも豊かな心と真理は見失わないでほしい。さまざまなことに遭遇するであろうが、人として避けなければならぬことがあり、一方では人として積極的に行動すべきことがある。ご清栄を祈念します。

大学院の厳しさ

教育学研究科博士課程前期 松浦 和美



オリキャンの打ち上げコンパ(本人左端)

内部から大学院に入ったとは言え、全ての面で厳しさを感じた二年間であった。しかし、その厳しさを経て得たものが三つある。一つは、研究の方法を学んだことである。素朴な疑問が研究の出発点であること、研究テーマを掘り下げ理論を構築することの難しさ、データに基づいて客観的に物事を考えることの大切さ等々、修士論文の作成を通して得たことは数え切れない。

長いようで短かった一年間

教育学研究科特殊教育特別専攻科 永井 浩史



私は学生といつても、現職の教員の内地留学制度を利用し、手当(給与)を受け取りながら一年間学校教育学部の学生として研修をさせてもらった。仕事、仕事で日々の生活に追われていた自分にとって、この

一年間は本当にユートピアのような毎日だった。おかげで体重が?キロも増えてしまった。さて、十数年ぶりの学生生活はどうだったかという、やはりいろいろな意味で時代の流れというものを感じた。まず、学生さんの身長の高さ、同時に足長になったなとも思った。次に教授の権威がなくなったというか、学生のマナーが悪くなったというか、講義中の私語の多さ。「赤信号みんなで渡れば怖くない」てな感じで少し残念だった。厳しい受験戦争を駆け切った学生たちの本当の姿なんですよ。まあ、ともあれ、日本最大の広さを誇るこの東広島キャンパスでの一年間、自分にとっては生涯忘れられない思い出となった。



トワエ・モアの世話をしている吉本先生と

い静ちゃん。ハードロックが大好きな祐三ちゃん。皆、かけがえない仲間である。三つ目は、自分自身がまたよっぽど分かったことである。私は研究者には向いていない。だから早く教育の現場に出たい。しかし、現場に出てもまた、いつかきつと研究をしたくなるだろうな。そんな気持ちも少し残っている今の私である。

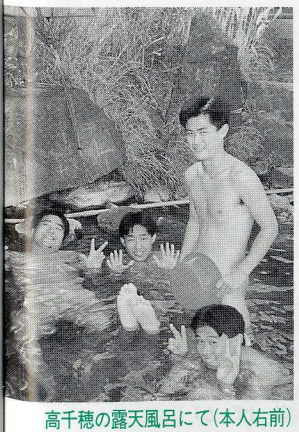
榎の木のこと

教育学研究科博士課程後期 河原 純一郎

高校の三年であった私が、広島への引越準備を終えたある春の日、祖父は私に一本の庭木にその名を書いた札をつけさせた。私が大学を卒業した時に「ここへこの札を見に来るといい。四年間がどれだけ早く過ぎたかがわかるだろう」と言うわけである。

以来、その札のことは忘れていた。実際には倍以上の九年を過ごしたが、その札のことを不意に思い出した。黒の太いペンで、ツツバマガシ」という名を縦書きしたことをありありと思い出した。記憶とは不思議なもので、普段は意識に達していなかったが、適切な時期に正しく働いたのである。

西条にはフェニックスの樹はない。しかし、いま私はこの樹にいくつもの札を付けたつもりでいる。一人では決して手の届かないところにまで、師や友の助けを得て数多くの札をかけることができた。これらの札は、今は意識できなくても、然るべきときにうまく機能すると私は信じている。



高千穂の露天風呂にて(本人右前)

故郷をさがして

学校教育研究科修士課程 箕島 隆

私が大学に入るまでの十八年間、父親の転勤のため大阪、東京、アメリカ、神奈川県と何度も転校を繰り返した。友人は「いいなあ、あっちこっち行けて」と言うが、私にとってはじつくり腰を落着ける「故郷」のような存在が欲しかった。親元を離れて神奈川県からほど遠い広島大学に入学してからは、六年が過ぎようとしている。技術科の教員になりたい、そしてできれば一人暮らしがしたいという単純な動機が、広島大学を選んだ理由である。



金工部屋にて(本人左下)

しかし私にとって、この選択は大当たりであった。私の一人暮らしの生活は、数々の友人との交流によって花開いた。そして技術科教育に関しても、指針となる先生や先輩との出逢いに恵まれ、そこでの経験や学修が自分にとってかけがえない財産となったからである。一生にとつて六年間は短いかもしれない。しかし、充実していた。この広島が自分の「故郷」になったと自信をもって言える。